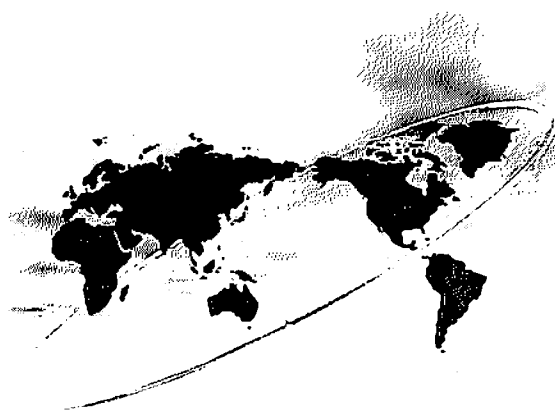


中部大学国際関係学部
「貿易風」 vol. 2 抜刷
2007年4月1日発行

未完のアジア学を継ぐ

—海域世界研究の実践—

赤嶺 淳



赤 嶺 淳*

未完のアジア学を継ぐ

—海域世界研究の実践



1. 島国根性

大学につとめて早くも6年がたつ。この間、わたしは「アジア文化論」なる科目を担当してきた。

この講義では大胆にすぎることは承知のうえで、日本語の「島国根性」が閉鎖的・保守的といった否定的なニュアンスで語られるのに対して、同じ島嶼国家であるフィリピンやインドネシアでは、島国という特性がむしろ積極的・開放的というイメージを喚起し、肯定されているのは何故なのかを問いつづけてきた。

その理由は、おおきく2つある。第1に、「フロンティア社会」とも形容されるような、領土に固執せず、人口移動のはげしい世界が存在することを学生に紹介し、日本社会を相対化することである¹⁾。教壇での経験では、途上国に関心がある学生をのぞき、たいていは東南アジアを選んだ社会ととらえ、それをストレートに軽蔑するか、逆にあわれむ場合のいずれかである(もともと、無関心な学生も少なからずいるが…)。ひとえにそれは、学生のモノサシが日本社会に根ざした価値観のみを基準とする貧弱さに由来する。だから、「アジア文化論」では、それとはことなるモノサシを提示することをねらっているのである。

目的の2点目は、いまだ試行錯誤の過程にあるが、東南アジア社会を鏡として、日本社会の将来を批判的に構想することである。グローバル時代といわれる今日、負の遺産ともいべき過去の「鎖国」制度を自慢していてもはじまらな

い。「日本」人の出生率の増加策を論じるばかりでなく、廉価な労働力としてのみとらえられている外国人を、日本社会の一員として迎え入れるには、どのような社会的合意を必要とするのだろうか。

近年の日本史研究が教えるところでは、そもそも「鎖国」は明治期以降につくられたフィクションである²⁾。そして興味深いことに小学館の『日本国語大事典』によると、島国根性ということばが使用されるようになったのも、1910年代後半以降のことであるらしい³⁾。このように「鎖国」に起因する、日本を閉鎖的な農耕民社会としてとらえるイメージは、どのようにして形成されてきたのか? この問いは、故網野善彦氏が提起してひさしいが、わたしも東南アジア研究を通じて、このディベートに参加したいと考えている。

というのも、たまたまわたしが関心をよせる干ナマコは、江戸時代に日本から中国(清国)へ輸出されていた商品である。同時期、東南アジアからも干ナマコが中国へと輸出されていた。ナマコという商品に着目して、過去400年ほどのアジア史のダイナミクスをとらえなおすことが、わたしの目下の研究課題であり、本講義もその一環である。

みずからの方法論に慎重であることは理解しているが、わたしが読んだかぎりでは、日本史の研究者は日本列島と中国大陸間の貿易しか論じないし、東南アジア史家は、東南アジアと中

*名古屋市立大学人文社会学部

国大陸間の事象しか遡上にのせていないようにおもわれる。唯一例外は、同じくナマコを主題に『ナマコの眼』(筑摩書房、1990年)という奇妙な書物を残した鶴見良行のみであろう。

鶴見は、オーストラリア北岸からスラウェシ島西岸を北上し、中国大陸にいたる海道をマカッサル海道と呼び、ナマコを通じて形成された、ひとつの文化圏を想定した。同様に蝦夷地をふくむ日本列島から中国大陸にいたる海道に着目し、オーストラリア北岸から蝦夷地にいたるまでの「ナマコ海道」圏とも表現すべき海域の歴史を再構築してみせたのである。

もちろん、わたしの「アジア文化論」も基本的には鶴見の延長上にある。本稿では、鶴見が『ナマコの眼』を上梓するにいたった過程を、鶴見良行の著作集(全12巻、みすず書房)を参照しつつふりかえり、鶴見のアジア研究の視座について検討してみたい。

2. 鶴見良行との出会い

鶴見良行は、1926年、ロサンゼルスに生まれた。父、憲は当時のロスアンゼルス領事であったし、父方のいここにあたる鶴見和子・俊輔両氏とともに戦後に『思想の科学』研究会の運営に携わったり、国際文化会館の企画部長をつとめたりしたことにもあきらかなように、鶴見はいわゆるリベラルな知米派知識人のひとりである。

そんな鶴見が、アジアに眼をむけるようになったのは、1965年のことである。南ベトナムでベトコンの公開処刑を眼にしたことが、その直接的な契機だったという(鶴見 1995: 6)。この時、鶴見は、ハーバード大学が開催する国際セミナーに参加するため、アメリカにわたる途中であった。セミナーの先輩には中曾根康弘が、同期生に大江健三郎がいたというように、セミ

ナーは日本とアメリカの知識人たちが、高級ワインを片手に(リアリティに欠ける)国際情勢を議論する雰囲気をただよわせるものであった。鶴見は、このセミナーに黒人や少数民族がいないことを不思議に感じ、エリート同士の交流に反発を感じたという(鶴見 1995: 7)。それだけではなく、冷戦構造のさなかアメリカ人の大半が、中共封じ込めのためには、ベトナム戦争やむなしとする風潮に嫌悪感をおぼえた鶴見は、アメリカとの距離をとりはじめる。同時に、アジアを自分の足であるきはじめるのである。

1967年うまれのわたしは、ベトナム戦争と同時代をいきていたにもかかわらず、ベトナム戦争や当時の日本はおろか、アジアをとりまく社会状況についての鮮明な記憶をもちあわせていない。大学に入学した1986年は、前年9月のプラザ合意をうけ、急激な円高がすすんでいたし、運輸省(当時)が個人旅行用の格安航空券の販売を許可したのをうけて、個人旅行が学生にも可能になった時期であった。現在では死語にひとしい「国際化」なることばがマスコミでとりあげられる時代状況のなか、いまさら炊米でもあるまいと、なんとなく東南アジアを旅行しはじめたのである。

わずか20年前の話であるが、東南アジアは、まだ身近な存在ではなかった。たとえば、今日でこそ、タイ料理屋は、ちょっとした都市なら、1軒や2軒はすぐに見つけることができるだろう。しかし、当時は東京でさえ、六本木と新宿に1軒ずつしかなかった。それくらいに東南アジアは、縁遠い存在であった。そして、専門書は別として、大学生が手にすることのできる書物はというと、これまた少なかった。そんな貧弱な知的環境のなかで、いつも眼にする著者名が、鶴見良行であった。

その鶴見が、上智大学で教えていることを知ったわたしは、ずうずうしくも教室まで鶴見をたずねていった。1987年10月のことだ。その後、1989年9月に鶴見が東京を離れるまで、4学期間、水曜日の午後は鶴見の講義を欠かさず聴講した。

もう時刻であろう。鶴見は生協でかならず350ミリリットルの缶ビールを2本購入し、いわゆるブラウン・バッグとよばれる茶色の紙袋にビールを入れて登壇した。教室にはいるやいなや、黒板を背にして机にすわり、プシュッとあける。それをチビチビと舐めながら、ふとくしてぶい声を発するのだった。そして、1本目があくそれを灰皿とし、タバコを吸った。みずから著した『海道の社会史』（朝日選書、1987年）を教科書に指定していたものの、脱稿以降の調査であきらかになったことや最近読んだ文献の紹介など、熱意あふれる刺激的な授業であった。バブル経済を背景としてわたしが東南アジアの貧乏旅行にのめりこんだのも、鶴見が講じる世界を迫体験したかったからである。

3. アジア研究の視角

『海道の社会史—東南アジア多島海の人びと』は、副題にあきらかなように、東南アジアの海を題材としたものである。わたしは、『マングローブの沼地で』（1984年）と『ナマコの眼』（1990年）に『海道の社会史』とをあわせて海を主題とした3部作とよんだことがある（赤嶺2002）。わたしは鶴見の著述活動を、その主題や手法、文体などから3期に分類しているが、海を主題とする3部作は、いずれも第3期の作品に分類できる。

第1期は、おもに日本社会についての評論を発表していた時期のことである。それが、ベト

ナム戦争とハーバードの国際セミナーを契機としてアジアをあるきはじめるようになったことは先述した。その結果、1973年には、「日本人」としてアジアとかかわる姿勢を覚悟するにいたる。

ベトナム反戦運動にかかわることで、私は、アメリカ、日本、アジアの相関関係をより深く認識するようになった。アメリカ、日本、アジアの相関関係とは、とりもなおさず、私が今生きている日本の現代ということだ（『私の関心』『著作集3』59）。

この自覚のもと、鶴見は、東南アジアと日本との不平等な関係を論じつつ、そのような不平等な関係を是正すべく、日本の変革を展望する文章をつづっていった。これらが、鶴見の第二期の作品である。水爆をもちいてマレー半島に運河を作ろうとする企画に端を発した『マラッカ物語』（1981年）や多国籍企業によるミンダオ島の開発をあつかった名著『バナナと日本人』（1982年）が、その代表作である。

鶴見によると、1930年代の軍国主義が膨張していた頃の日本人は、だれひとりとして中国大陸における戦争とかかわりなく生活できなかったように、1970年代の日本は東南アジアでの経済活動と無関係に生きていけない時代状況にあった。

いまや日本は経済大国として、私たち自身の想像を超えるほどに、アジアの人びとの日常の暮らしを左右する力を持つことになった（『アジア報道の方法』『著作集3』66。初出は1973年）。

まず、このことを自覚しようというのが、鶴見が東南アジアとかかわる際の基本スタンスであった（鶴見 1995: 90-91）。そのうえで両者が

平等な関係をきずくにあたっては、「風がふけば桶屋が儲かる」的な連鎖を脱却すべきことはもちろんのこと、日本社会だけが一方的に変化していくのではなく、その変革は東南アジア社会の変革と歩調をともしなければならないべき方策を鶴見は模索していた。

(ロッキード事件みたいなものがおこっているけど) 私たちはこういう社会はいやなわけです。そうではない社会につくりかえていく作業と、第三世界の民衆とつなげていく作業というものが、ひとつの作業としてつながってこないといけないんじゃないか(「われらの地図を描く—日本とアジアのしくみを考える」[著作集3]247。初出は1976年)。

ベトナム反戦運動のデモに参加していた鶴見は、50歳をむかえるころから、運動における自分の役割を意識するようになる。1976年に「思想の科学」に執筆した「新左翼考」という文章のなかで、鶴見はみずから「運動的ジャーナリスト」と位置づけ、その使命を次のようにのべる。

運動にかかわる物書きとして、私はこれまでに運動論めいたものをかなり書いてきた。以後、この種のものにはなるべく禁欲していきたい。物書きであることをやめて、運動にかかわることが、私自身の指摘にこたえる一番の本道なのであろう。しかし、それは年齢、経験、資質などの条件から、もはや可能ではない。／運動にたいして事実を報告する調査報告書。それが私にとって唯一の運動にたいするかわり方だろう。運動的ジャーナリストは、組織者としてで

はなく、事実通報の補助的役割をもって運動にかかわる(「新左翼考」[著作集3]275)。

興味深いのは、運動的ジャーナリストを意識しはじめた時期に、後進の指導をも意識していたことである。「新左翼考」をあらわした翌1977年に着手したバナナ研究も、日本側とフィリピン側との共同研究であったように、研究と運動との連携を意識したものであった。このような市井の研究者を育てたい、という鶴見の意志は、「はだしの研究者募集中」(1977年)という文章に顕著である。

雑誌(引用者注一「AMPO」)を出しながらいろいろなことを考えましたが、その中でもっとも痛感しているのは、<知識人として行動する人間>の不足ということです。知識人というコトバが嫌味なら職能人といってもよろしい。自分の知的職能をテコにして、この社会を分析し、具体的な批判の行動に移してゆく人間のことで、文化隆盛のお蔭でコトバで食べている人間は腐るほどいますし、逆に勉強はしないが行動だけはする人間も少なくはありません。しかし、両者を兼ねる人間が今の教育制度から自動的に生まれてくると思うのは、ほとんど絶望的であるようです(「はだしの研究者募集中」[著作集3]281)。

この問題の解決策として組織された「アジア勉強会」の目標として、鶴見は以下の3点をあげている。(1) 教養としての知識の習得ではなく、民衆の場に立って本質的にものを考え、行動する「はだしの研究者」の創造を主とする。(2) 今日の世界と日本の現実をとらえうる理論をつくりだす基礎として、社会科学の諸古典の拱

取を通じて体系的かつ具体的に思考する習慣を養う。(3) 第三世界、とくにアジアと日本とのかわりにおいて、日本近現代史を位置づける(「はだしの研究者募集中」[著作集3]281)。

3点目は、とくに重要である。アジア学をたんにアジアについての勉強におわらせるのではなく、「ナマコの眼」に通じる、アジアの近現代史を日本列島史とのつながりで理解しようとする姿勢が、すでに提出されているからである。今日でも、学問が精緻化をたどるなか、こうした東南アジアを日本との関係でとらえようとする試みは稀といっている。

とまれ、この勉強会の成果について、鶴見はアジアの多様性についてあらためて認識し、今後の構想をたてなおすことができたと総括している。

アジアは多様だとよくいわれる。これは確かに事実ではあるが、この事実の強調は、反面でアジアの多様性と日本の一様性(一民族、一言語、一宗教)という対比を生みやすい。だが、日本社会は、それほどに一様であったのだろうか。…第二の発見は、植民地化の多様性を手がかりとする将来の想定である。植民地主義が東南アジア諸社会の内陸部を世界資本主義に組み込んでゆく19世紀以降の過程を、私は商品の歴史(フィリピンの砂糖、マラヤのゴムと錫、ビルマの米)で比較した。この過程もまた一様ではない。その相違は、商品の性格、本国の事情にもよるが、住民の対応の仕方にもちがいがあった(「はだしの研究者募集中」[著作集3]337)。

つまり、東南アジアの多様性を認識するにつ

れ、日本は言われているほど均質な社会なのか、という疑問をつよくすることとなったのである。同時に、それは植民地主義の再検討の動機づけとなった。このふたつの問題意識は、コインの両面として一体化し、第3期の、海を主題とする研究活動にも継承されていく。それは端的に表現すれば、農本主義的な陸中心の世界観ではなく、海から陸を見つめなおしてみよう、という歴史認識の逆転を模索したものだといえる。その端緒が、陸でもなく海でもない汽水帯における人間の活動に着目した「マングローブの沼地で」での学問批判にあらわれることとなる。

4. あたらしいアジア学の構想

バナナの研究を終えた鶴見は、アジア・太平洋資料センター(PARC)を中心に1981年末に村井吉敬らとエビ研究会を開催する。この研究を契機として、鶴見は東インドネシアを精力的にあるきはじめる。

この第3期に鶴見は、「あたらしいアジア学」を標榜するようになる³⁾。「はだしの研究者」を募集してから、10年後のことである。なにがあたりしかったのか。この時期の著作をよむかぎりでは、アジア勉強会以来もちつづけていた日本社会へ批判的精神、既製の学問体制への反感、そこに由来する自前の研究者養成への意志は一貫している。

それまでとことなる点は、鶴見が意識的に東南アジアの辺境の島じまをあるいていたことである。鶴見のいう辺境とは、植民地主義に見捨てられた地域のことである(鶴見 1995: 151)。

鶴見自身がどうよんだかは定かではないものの、この時期の鶴見の学風は、一般に「鶴見アジア学」あるいは「辺境学」などとして知られている(鶴見・山口 1986)。ちょうどわたしが東

南アジアに関心をいだきはじめてころに、よく耳にしたフレーズである。

『海道社会史』は、そんな鶴見の学風を確立した書物であった。その後、鶴見の研究上の問題意識と方法論的な工夫は、『ナマコの眼』に凝縮される。

では、その特徴や方法論はどんなものであったか。まず、手法としては、「モノ研究」があげられる。生産から流通、消費を一貫して研究するというバナナやエビの研究から開発した手法である。ある商品に着目して、生産から消費までの連鎖がもつ歴史性を追求するなかで、たんに好事家的なモノの研究におわらせず、モノをとおして社会の矛盾をみごとにえがきだしたのである。

この「モノ研究」と「モノの研究」の差異について文化学研究者の吉見俊哉は、「モノへの眼差しではなく、モノからの眼差し」と端的に表現している(吉見 2005: 219)。鶴見のモノ研究への志は、今日の学問的なフレームでいえば、世界システムの関心を人類学的に実践した多重地域民族誌研究(multi-sited ethnography)といえるであろう(Marcus 1998: 91-92)。また、ナマコ研究を通じて世界市場は、ヨーロッパにだけ成立したのではないことを立証した点で、フランクの「リオリエント」(1998=2000)を先取りしていた点でも評価されるべきである。

第2に、第3期の鶴見は、植民地主義の再考を意識していた。一般的には、ポルトガル人が1511年にマラッカにやってきた時点をもって東南アジアは植民地主義にからめとられたと考えられている。しかし、実際にはそうではなかった。東南アジアは、そんなヤワな存在ではなかったのである。

植民地主義は、その統治の形態から前期と後

期に区別できる。前期は16世紀初頭から19世紀初頭までのおよそ300年間で、香料などの奢侈品の交易支配を目的としていた。他方、19世紀中葉に本格化する後期植民地主義は、西洋人たちが直接的に土地支配をおこなった。いわゆる世界市場に原材料を供給するための麻やゴム、砂糖、タバコ、藍などの作物を単一に栽培したプランテーションの浸透である。

鶴見は、植民地主義を二分したうえで、まず、前期植民地主義期には、面の支配ではなく点の支配であったことを強調する。また、後期植民地主義においても、東南アジアの全域でプランテーションが経営されたわけではない。東インドネシアのいわゆる多島海には、プランテーションが拓かれなかった島も少なくないからである。

くわえて、流通の複雑さから西洋人たちが手をだせない貿易もあった。それが中国市場むけに生産されていたナマコであった。つまり、ナマコに眼をつけることにより、植民地万能主義ともいえる、西洋中心主義におちいった歴史理解を打破しようとしたのである。

第3に、脱国家主義を指摘できる。『ナマコの眼』があつかう地域は、南はオーストラリア北岸や南太平洋から北は沿海州におよんでいる。つまり、鶴見は東南アジア史をふくむ東洋史と日本史、西洋史を包摂したアジア史を構想していたことになる。昨今の学術用語で言えば、グローバルヒストリーへの展望と換言できよう。同時に、日本列島史を列島外にひらくという意味において、網野善彦らに通じる日本社会への批判的視座を一貫してもちつづけていた(『海を歩く思想』[著作集8]196)。

5. 日本をとらえなおす眼

東南アジア体験のない学生に東南アジアの話をする、ややもすると植民地主義の弊害のみが印象づけられ、貧困あるいは未開というかたちで学生の記憶にのこることとなる。そのような歴史観からは東南アジアの主体性が失われてしまい、かえって植民地主義が万能であったことを認めるようなものである。

鶴見が意図したように——もしくは世界システムの——東南アジアの貧困は、わたしたち日本社会の繁栄の裏がえしなのだ、という自覚を学生と共有するには、どのような仕掛けが必要なのであろうか。ベトナム戦争が他人事ではなく、東南アジアの貧困がよそ事ではなく、自分の問題として理解できるような想像力はいかにしたら獲得できるのか。

やや飛躍するかもしれないが、そのような歴史観と日本社会を相対化できる想像力とは、わたしは根ではつながっていると考えている。授業での一例をあげて説明しよう。アジア文化論の授業では、わたしはたびたび稲作論をあつかってきた。アジアの広がりを実感できる題材であるし、考古学から民俗学、生態学までをふくむ学際的なアプローチが可能であるからである。

講義には、2001年にNHKが5回シリーズで放送した「日本人はるかな旅」を部分的にもちいることがおおい。同番組は、遺伝子学や考古学、民族学のみならず、さまざまな分野の最先端を駆使して、日本列島住民の祖先がどこから来たのかを考察したものである。7世紀中葉といわれる日本国成立以前の人びとを「日本人」よぼわりすることに抵抗を感じるものの、それ以外は狭大なナショナリズムにおちいることなく、日本列島住民がもつ北方要素や南方要素にも目配りした良作といってよい。最新の学術成果をと

りいれ、コンピューターで製作した画像を多用している点も特徴的である。

しかし、なぜだか、第4集「イネ、知られざる1万年の旅」(2001年11月11日放送)だけが、わたしには違和感のつよい作品に仕上がっている。全体的には、稲作の起源を中国にもとめ、それが日本列島に移入された経過を説明するシナリオである。ラオスで焼畑の取材をし、なにも水田耕作が稲作のすべてではないことも示されている。

ところが、番組の随所に「稲の民・日本人」という表現がすりこまれているのである。そして番組の最後は、品種改良を重ねた結果、熱帯性の植物であったイネが20世紀初頭に北緯44度43分の亜寒帯にまで栽培されるようになったことをたたえて幕をとじる。番組全体が、まるで日本人はみな「稲の民」というアイデンティティーをもっているかの前提ですすめられ、しかもそれを美談にしたあげているとの印象さえうける。

東南アジアは、もちろん、現在の日本がくらべもようのないくらいに、米食がさかんである。若干のおかずは平皿いっぱいの白米を食べるのが調査地での食事である。不漁がつづく、醬油かけごはんもめずらしくない。

1960年代後半の「緑の革命」以降、在来種が減少したとはいえ、東南アジアには、多様なイネの品種とそれらに適応した栽培法も多岐にわたっている。とはいえ、東南アジアの全域で稲作がなされているわけではない。とくに東インドネシア地域では、サゴヤシとよばれるヤシ科の植物の髓にたまる澱粉を主食としている。また、バナナや日本のサトイモにあたるタロイモ、南米起源のキャッサバイモを主食とする地域も少なくない。『海道社会史』で、それらの記述

にふれ、主食といえば稲か小麦しか思いつかなかったわたしは、単純におどろき、サゴヤシを食べてみたいと思った。実際に葛状にお湯に溶いたサゴ澱粉を食べたときの感動は、いまでもおぼえている。1991年2月、マレーシアのサラワク州でのことだった。

なにが、そんなにうれしかったのか？ それまでの自分が無批判にうけいれていた常識を、みずから破壊している姿に酔っていただけの話かもしれない。のみならず、アジア勉強会の成果として鶴見があげるように、東南アジアを鏡としながら、日本の多様性を掘り起こす視点を獲得できたよろこびであったことは、まちがいない。事実、日本におけるイモ食文化論・畑作文化論を研究し、稲作中心史観を批判する坪井洋文を知ったのは、鶴見の講義であった。

2005年度の講義では、わたし自身が獲得してきた脱稲作イデオロギーの体験談をしゃべった後に学生にビデオを観てもらい、「『稲の民・日本人』というアイデンティティーは、幻想にすぎない。なぜNHKは、このようなアイデンティティーを創出しようとするのか。その意図を論じなさい」との課題をだした。

すると、ある学生が、「北海道と沖縄を除けば、NHKによる表現は、なんら問題はないのではないか」と答えたのである。もちろん、この学生には悪気はない。ただ、濃尾平野で育ったみずからの生活環境とはことなる「日本人」への想像力が欠如しているだけのことなのであろう。

なにもわたしは、この学生に国民国家としての日本像を強要しようとしているのではない。しかし、「日本人はるかな旅」が意図するところの「日本人」は、北は北海道から南は沖縄までふくんでいなくてはならないはずだ。NHKが意図するように、わたしたちが、北海道の開拓者

やウチナンチューもふくめた意味で「日本人」を発展的に語るようになるためには、まず、この学生のような無邪気なヤマトンチューの想像力を鍛えることからはじめねばならないのが現状である。

わたしは、この学生のコメントを耳にしたとき、琉球史家の安里進が批判していた「遅れた歴史的出発論」をおもいだした。安里によれば、遅れた歴史的出発論とは、1960年代初頭に琉球史研究に大きな影響力をもった歴史観で、中国や朝鮮の史書への登場、文字の伝来と使用、仏教の伝来、中央集権国家の確立、文学書や史書の編集などを勘案すると、本土にくらべて沖縄は800年も遅れており、その後進性をいかに克服すべきかを論じたものだという。一時はみずからも「遅れた歴史的出発論」に影響をうけたという安里は、「沖縄学—交易を軸に発展したサンゴ礁の島々」という短文のなかで、歴史観の転換をせまっている。

わたしは「遅れた歴史的出発論」は、農業生産を基礎に社会発展をとげた本土の歴史をモノサシにして沖縄の歴史を計るという方法論の産物だとみている。沖縄と本土を歴史的に不可分一体の存在とみる観点からすれば、本土という中央のモノサシで地方としての沖縄を計ることになる。農業社会の成立が遅れ、近世にいたっても農業生産力が低い琉球社会を、本土のモノサシで計れば遅れた社会としかみえないだろう。……(沖縄の古代社会は)弥生農耕文化が到達しない遅れた社会だったのではなく、交易という経済活動を主軸に発展してきた社会として評価しなおすべきである。本土とはことなり、交易社会で発達する社会という理

解である(安里 2002: 143)。

6. 未完のアジア学

安里の主張は、東南アジアの島嶼社会についても、そのままあてはまる。世界地図に眼を転じてみよう。東南アジア海域が、世界有数の多島海であることに気づくはずだ。とくに、インドネシアのロンボク島以東のウォーラセア(Wallacea)海域における島のおおさはきわだっている。

ウォーラセアとは、ウォーレス(Wallace)の島じまという意味である。一九世紀半ばに、この海域を探検し、この海域に生息する動物の種類が、アジア大陸のものとなることを発見した英人博物学者アルフレッド・ウォーレスにちなんだ名称である。ウォーラセアは、インドシナ半島からスマトラ島、ジャワ島、カリマンタン島を包摂する大陸棚(スンダ陸棚)とオーストラリア大陸からニューギニア島周辺を覆うサフル陸棚とに挟まれた海域をさす。

今から180万年前にはじまる更新世に、地球は、しばしば寒冷気候にみまわれた。寒冷期(氷期)には海面が後退(海退)したし、温暖期(間氷期)には海面が上昇する海進がおこった。もっとも最近の海退期は、3~1.5万年前のことだと考えられている。これまでの数度にわたった海退期にも、スンダとサフルの両大陸が陸つづきになることはなかった。いいかえれば、それほどまでにウォーラセアの島じまは、深い海に抱かれているのである。

深く、澄んだ海水には、サンゴもゆたかに育つ。大陸棚上の海が、水深が浅く、泥性の海である点で対照的である。サンゴ礁は、「海の熱帯林」とよばれるように、生物の多様性に富んでいる。たとえば、今日の市場で需要のたかい

カニやエビ、ハタ、イカのほかに、カツオ、マグロ、トビウオなどの回遊魚も豊富である。また、ナマコ、サメ、真珠貝、高瀬貝、玳瑁(タマイ)など、長期間にわたって利用されてきた資源にも恵まれている。

鶴見が晩年に積極的にあるいたのは、このウォーラセアであった。ここは一部をのぞき、植民者たちがプランテーションを開発することはなかった。しかも、中国市場向けの海産物貿易は、西洋人の管理下におかれることがなかったことは、先述したとおりである。

鶴見の唱えたあたらしいアジア学の特徴は、陸ではなく、海から思想を組みなおそう、という点にあった。同時にそれは、ジャカルタやマニラなどの中央ではなく、辺境地帯から中央を照射しなおそう、という中央主義史観の批判でもあった。そして、その射程は、東南アジア社会の理解のみにおわらせるのではなく、調査者であるわたしたち自身の眼はもとより、調査成果を消費する日本社会をひらいていこう、とのつよい思いにつらぬかれていた。

新しいアジア学が新しい日本学と手をたずさえてゆく。私はそんな試みをほちほちと進めたい(「はだしの研究者募集中」[著作集3]337)。

鶴見が構想したアジア学は、いまだ完成していない。それどころか、アジアについての知識を蓄積していくことはもちろんのこと、その知識を統合して日本社会をとらえなおし、その先に日本社会の変革を期待する以上、永遠におわりのない作業だといわざるをえない。しかし、このダイナミクスこそが、海域世界研究の存在意義であろうし、その意味においてもナマコがはなつ問いは、なかなか魅力的である。

注

- 1) フロンティア社会論については、田中(1999)を参照のこと。
- 2) 『日本語大辞典』は、「島国根性」が使用された初期の用例として田山花袋が1917(大正6)年につづった「東京の30年」のなかの「3000年来の島国根性」をあげている。
- 3) たとえば、「新しい東南アジア学の構想」(1987)以外にも、「海を歩く思想—漁業からみた日本と東南アジア」(1989)や「河海からみた大地—東南アジア文化への試論」(1991)、「島は思想を鍛える」(1992)などに、鶴見の意図した東南アジア学の構想はあきらかである。なお、ここにあげた小論は、いずれも「海の道」と題した「鶴見良行著作集」第8巻に収録されている。

参考文献

- 赤嶺淳、2002、「鶴見良行『海道の社会史』」、松田素二・川田牧人編『エスノグラフィー・ガイドブック—現代世界を複眼でみる』、嗟峨野書院、246-247頁。
- 安里進、2002、「沖縄学—交易を軸に発展したサンゴ礁の島々」、『AERA MOOK82 古代史がわかる』、朝日新聞社、142-144頁。
- フランク、A.G.、2000、山下範久訳『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー』、藤原書店。(Frank, A.G., 1998, *ReOrient: Global economy in the Asian age*. Berkeley: University of California Press.)
- NHKスペシャル「日本人」プロジェクト編、2001、「日本人はるかな旅4—イネ、知られざる一万年の旅」、日本放送出版協会。
- 田中耕司、1999、「東南アジアのフロンティア論にむけて—開拓論からのアプローチ」、坪内良博編、『<総合的地域研究>を求めて—東南アジア像を手がかりに』、京都大学学術出版会、75-102頁。
- 鶴見良行・山口文憲、1986、「越境する東南アジア」、平凡社。
- 鶴見良行、1995、「東南アジアを知る—私の方法』、岩波新書(新赤版)417、岩波書店。

鶴見良行、2000、「鶴見良行著作集8—海の道」、みすず書房。

鶴見良行、2002、「鶴見良行著作集3—アジアとの出会い」、みすず書房。

吉見俊哉、2005、「鶴見良行とアメリカ—もうひとつのカルチュラル・スタディーズ」、『思想』12月号(980号)、201-222頁。

Marcus, George E. 1998. *Ethnography through thick and thin*. Princeton: Princeton University Press.

付記

本稿は、2005年12月17日に東北大学・東北アジア研究センターにて開催された国立民族学博物館・地域研究企画交流センター連携研究「地域域研究における記述」において口頭発表した「ナマコ研究のめざすもの—多重地域研究とモノ研究」に加筆修正したものです。発表の機会をあたえてくださった地域研究企画交流センターと同研究会の参加者に感謝いたします。なお、本稿の脱稿直後に早瀬晋三氏の「歴史空間としての海域世界」(『岩波講座「帝国」日本の学知第8巻 空間形成と世界認識』、岩波書店、277-309、2006年)を目にしました。早瀬氏の海域世界観・鶴見良行批判については、早瀬氏の原著『海域イスラーム社会の歴史—ミンダナオ・エスノヒストリー』(岩波書店、2003年)の議論をふまえ、いずれ機会をあらためて論じたいと考えています。